



科学の眼

まなこ

発行:姫路科学館 (〒671-2222 姫路市青山 1470-15 電話:079-267-3961)
<http://www.city.himeji.lg.jp/atom/>

生物シリーズ

♪ 夏が過ぎ～

カブトムシの一生

Trypoxylus dichotomus

姫路科学館 管理指導主事 青野克美

真夏の里山をにぎわせたムシたちも、秋風が吹く頃その一生を終えていきます。こどもたちに大人気の真夏の昆虫の王者「カブトムシ」も8月の後半には、多くが一生を終え、新しい命へと引き継がれるのです。

今回は、カブトムシの一生を振り返りながら、カブトムシの生態を紹介しましょう。

■「カブトムシ」と「クワガタムシ」の仲間

夏の昆虫の二大王者はカブトムシとクワガタムシの仲間ですが、どちらもコウチュウ目に属しています。分類上では、図1のようになり、「コガネムシ」の仲間といえます。進化の過程でカブトムシは「角(つの)」を、クワガタムシの仲間は「アゴ」を武器として特化していったと考えられています。

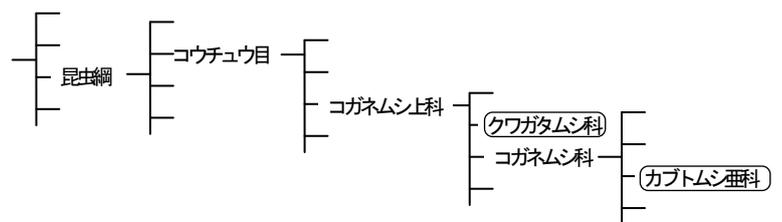


図1 分類上の位置

カブトムシの仲間は日本では「カブトムシ」「サイカブト」「コカブト」「クロガネコガネ」など数種が知られています。一方、クワガタムシの仲間は、「オオクワガタ」「ノコギリクワガタ」「コクワガタ」など40種程が知られています。

カブトムシは、様々な環境に順応しやすく、幼虫のエサとなる腐葉土も豊富にあるため、日本各地で生息していますが、クワガタムシの仲間は、気温や森林の種類などわずかな環境の違いでそれぞれの種で棲み分けているので種によって生息範囲が限定されています。そのため、飼育する場合でもカブトムシの方が育てやすいのです。

■幼虫から成虫へ

交尾した雌は、しばらくして直径2mmほどの卵を産みます。10日程たつと、卵は黄色味をおび、直径4mmほどになり、孵化（ふか）します。

孵化した幼虫は、1齢幼虫と呼ばれ、脱皮を繰り返して、2齢、3齢（終齢）とぐんぐん大きくなっていき、幼虫の時期を終えます。カブトムシは、成虫になってからどんなにエサを食べても大きくなりません。特に2齢幼虫の時にどれだけエサを食べるか、また、どれだけ幼虫期間が長いかで、その後の成長に影響します。

3齢幼虫のからだのしわが深くなり、黄色味をおびはじめると、蛹（さなぎ）への準備の前蛹（ぜんよう）の時期をむかえ、やがて蛹になります。（図2、写真1・2）

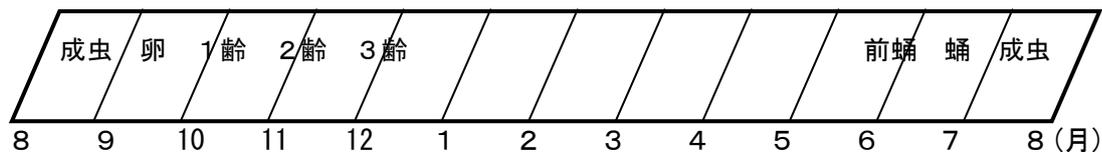


図2 カブトムシの一生



写真1 前蛹 (2012年6月8日)



写真2 蛹 (2012年6月17日)
蛹になった直後は、真っ白

写真3はマット（クヌギやナラを発酵させた産卵飼育用）上の蛹です。普通は、写真2のように蛹室（ようしつ）の中で成虫になるのを待つのですが、写真3のように蛹室を作らず蛹になることもあります。しかし、この場合は、ほとんどが羽がうまく開かない羽化不全になります。（このカブトムシも羽化不全でした）

3齢時の幼虫の脱皮殻



写真3 マット上の蛹

■戦いすんで

カブトムシの雄は、エサの取り合いや雌の奪い合いで争います。右の写真は、飼育ケースの中の雄の争いの様子です。しばらくふんばっていましたが（写真4①）、最後に投げ飛ばされてしまいました（写真4②）。

夏の間、里山でさかんに活動していたカブトムシも、8月後半には、新しい命を残して、その一生をおえます。

誕生から死までのライフサイクルが1年で、比較的飼育が容易なカブトムシ。一度育ててみませんか。



写真4 雄同士の争い